

アルヴァ・アアルト生誕120周年記念 展覧会

内省する空間 アアルトの図書館と住宅

企画・キュレーション：和田菜穂子

日本建築学会建築博物館委員会委員

一般社団法人東京建築アクセスポイント代表理事

日本建築学会建築博物館委員会ではフィンランド留学経験者やアアルト研究者等を集め、ワーキンググループを結成し、フィンランドセンターと共同主催という形でアルヴァ・アアルト生誕120周年にちなみ、展覧会および国際シンポジウム「内省する空間 アアルトの図書館と住宅」を開催した。

展覧会は2019年3月4日（月）～3月17日（日）の2週間、日本建築学会建築博物館ギャラリーにて行われた。「内省する空間」＝「一人で思索に耽る空間」として主に読書空間を取り上げ、図書館および住宅（書斎）の模型を展示した。今回新たに製作した模型は、《ヴィープリの図書館の断面模型》、《セイナヨキの図書館の断面模型》（制作：名古屋市立大学久野研究室ほか名古屋の各大学有志）、《ロヴァニエミの図書館の断面模型》（制作：東京理科大学垣野研究室）、《マイレア邸のウィンターガーデンのインテリア模型》、《ルイ・カレ邸の書斎のインテリア模型》（制作：東京理科大学岩岡研究室）、《マイレア邸》（制作：東北芸術工科大学西澤研究室）である。これに約20年前「アルヴァ・アアルト住宅模型製作ワークショップ」（日本大学芸術学部デザイン学科建築デザインコース主催、2000年）で制作された住宅模型《マイレア邸》《ルイ・カレ邸》《コエタロ》《アアルト自邸》を加えた。これらは関口美術館で大切に保管されていたもので、この展覧会を機に再び陽の目を見ることとなり、展覧会終了後は東京理科大学に寄贈された。さらにアアルトから薫陶を受けた武藤章設計の《工学院大学旧八王子図書館》（制作：工学院大学鈴木研究室）と《旧白樺湖夏の家》（制作：武藤章研究室）の模型も合わせて展示した。武藤章研究室の模型は約50年前に制作されたものだが、保存状態が極めてよかったため、模型材料のバルサ材が程よい飴色に変質していた。このように模型材料や制作年は異なるものの、いずれも丁寧かつ精細に制作された建築模型が一堂に集まり、展示された。展覧会会場構成は東京理科大学博士課程の大村高広と堀越一希が担当。アアルトのツールに腰掛けて模型内部を覗くという画期的かつ斬新な展示手法であった。鑑賞者は腰掛けることでじっくり時間をかけて模型に対峙し、覗き込むことで空間を注意深く観察することができる、まさに「内省」というテーマに相応しい展示だった。2週間の会期で1550人の来場者があった。

○会場構成について

明々白々のことながら、会場構成はできるかぎり透明になることが求められる。そして展示空間をいかにして鑑賞経験の「地＝環境」とするか、という課題はつねに、展示物の個別具体的な性格と会場の物理的特徴のあいだで揺れ動く配置＝レイアウトを吟味していくことでしか達成できない。

そのうえで「内省」と「読書」をテーマとする本展においては、鑑賞者が展示物と一対一の関係で向き合える環境を用意することが大切だと考えた。ひとつの展示物を複数人で同じ場所から眺める、ということではなく、ひとりの鑑賞者がひとつの展示物を独占すること。まさに本を読むように模型と出会い、「あなたと私」という鑑賞者と展示物の対話的状況を限られた展示スペースのなかで用意すること。であれば会場構成のコンセプトは単純明快で、展示物の鑑賞位置を独立させ、展示空間をできる限り広く使いながらそれらを分散配置していくこと、となる。

さて、本展の主たる展示物となる「断面模型」はひとりの鑑賞者の身体が他者の鑑賞を妨害せざるをえない、という少々特殊な性格をもっている。が、上記の視座に立てばこれはむしろ都合な与条件である。問題は、模型の前に長時間いすわり鑑賞を占拠することを当たり前のように許容するような雰囲気をつくり出して用意できるか、という点であるが、そのために今回は、断面模型以外の展示物（全体模型、写真、図面、テキスト）の鑑賞においても特定の体勢・位置での鑑賞が促されるようにサイズや色、距離関係を調整していった。

ある人物、ある展示物、ある場所がつくるひとつの個別具体的な「ここ」からの眺めのセッシー鑑賞者と展示物の局所的な関係性のもつれーのレイアウトの調整により、展示室内の鑑賞者の位置、体勢、首の角度、動線、移動の速さ、等々は散り散りになっていく。翻ってはそれが、展示物（とりわけ断面模型）とのじっくりとした対話を約束するものとなるだろう。

○展示什器について

展示物の多くが「建築の断面模型」であることから、通常のテーブルより高い950mmを天板の高さとして設定した展示什器を本展に合わせ10台製作した。納期が一月と短く、予算は限られており、搬出入はトラック一台のみという緊迫した状況にあったが、この厳しい条件をむしろ設計の「手掛かり」として読み替え、以下の5つのタスクを導き出した。

- ① ホームセンターで買える流通材のみ使用。
- ② 「歩止まり」として作業工程を減らし、施工合理化。
- ③ 接合部ほかにビス、金物等は一切用いない。最小限の部材でつくる。
- ④ 搬出入時のスタッキング、軽量化を考慮。
- ⑤ 高さ950mm、耐荷重100kg。展示物が重いためマージンをとって構造を決定。

製作過程の徹底した合理化は余分なディテールを放逐し、什器それ自体の形状の中立性へと結実することとなった。また、接合部に金物や接着剤を用いずほぞ継を採用したことで、流通材ならではの品質のバラつきを加工段階で吸収しており、要求された10台を高速かつ高精度で製作することに成功している。

形状の中立性は鑑賞の透明性を約束すると同時に、制作時期も制作方法もばらばら多数の模型を展示しているにも関わらず、「静かな全体性」ともいえるような空間の質を展示室にもたらしめている。

【寸法】幅×奥行×高さ:77×182×95cm、天板厚み:2.1cm

【素材・仕上げ】脚:無垢材、天板:ランバーコア合板、マットウレタン塗装

MODEL

DRAWING/TEXT

PHOTO

会場デザイン：大村高広 + 堀越一希

会場構成：大村高広

展示什器設計・制作：堀越一希

(協力：磯貝直人、大澤祐太郎、小浦幸平、伊藤昌志、高橋遼平)



撮影：山田新治郎



撮影：山田新治郎



撮影：山田新治郎



撮影：山田新治郎



撮影：山田新治郎



別世界へと誘う図書館の読書空間

垣野義典（東京理科大学）

フィンランドの冬は暗く長い。10月から翌年4月までは最低気温が零下になり、3月まで降り積もった雪が消えない。冬至は、日の出 9:00 過ぎ、日の入 15:00 過ぎで日照時間は6時間未満と、一日の大半が夜のように暗い。だからだろうか。自宅のようにくつろぐことができ、しかも何かに、誰かに出会える公共図書館の利用率はフィンランドが世界一位といわれている。

アアルトは大学図書館をふくめると、生涯で10を超える図書館を設計している。その中でも、この展示会で取り上げているヴィープリ、セイナヨキ、ロヴァニエミ図書館はアアルトの代表作といえよう。

これら3つの図書館の読書空間には、いくつかの共通点がある。その図書館の中心となる読書空間は、半地下空間をもちながら、基本的にはワンルーム空間とし、仕切りを設けず、利用者のよどみない動きを極力妨げないよう計画されてい

る。そしてこの半地下空間には、アアルトが設計した机とイスが、まさにこの場所以外には置き場所が無いかのように建築にぴったり設えられている。

本棚は、壁と一体に扱われており、決して単純にドミノのように並べられてはいない。この本棚により生み出される本の風景が、来館者をやさしく読書空間へ迎え入れ、包み込む。寒く暗い冬にあっても、館内を一步進むごとに、あるときは本の風景の中を散歩しているかのように、あるときは書齋でくつろいでいるかのように、別世界へと誘う。

他方、この3つの図書館の自然光の取り入れ方は対照的だ。ヴィープリでは、自然光は、真上からいくつもの円筒状の窓を通して柔らかく取り込まれている。セイナヨキではルーバーとハイサイドの窓を通して南側から直射日光が取り込まれ、逆にロヴァニエミではルーバーは用いず、北側からハイサイドの窓を通して取り込まれる。

優雅な住宅の中に潜む cozy な空間

岩岡竜夫（東京理科大学）

マイレア邸（1938）は、フィンランド西部のボスニア湾に面するポリ市郊外の林の中に建つ邸宅で、現代芸術に造詣の深いマイレ・グリクセン（旧姓アールストレム）夫人がオーナーである。一方、カレ邸（1959）は、フランス・パリ郊外の緩やかな丘の上に建つ邸宅で、同じく現代芸術家のパトロンであるルイ・カレ氏がオーナーであった。

互いに場所も環境も異なり、竣工時期にも20年の隔たりがあるため、例えば、自然への模倣／地形との連続性といった、アアルトの設計手法の異なる側面が見られるが、当時の現代芸術との繋がりという点で、個人住宅でありながら社交の裏舞台として利用されていたことは想像に難くない。こうした華やかな郊外住

宅であったからこそ、家主が内省し物思いに耽る場所として、書斎（ライブラリー）やデン（DEN）のもつ役割は重要であっただろう。

例えば、マイレア邸の1階広間の片隅の階段裏につくられたグリーンルーム（ウインターガーデン）は、マイレ夫人のお気に入りの部屋であった。一方、カレ邸の玄関から広間へと向かう広々としたギャラリーの脇には、床の段差を利用した立体的な書斎がつけられている。それぞれ25m²にも満たない閉じたスペースでありながら、外部への視線と外部からの自然光、さらに身体化された内部を演出する様々なモノや家具が一体となり、人間の思考をその内面へと向かわせる空間が、こうして準備されていた。

アアルト自身のための内省空間

小泉隆（九州産業大学）

建築以外のことに多くの興味を示さなかったアアルトにとって、建築を創造するために、思索に耽り、スケッチをし、書物に求める場が内省する空間と言えるであろう。

1936年に建てられたアアルト自邸の西側にはアトリエが併設されている。1956年、近くにアアルトスタジオが作られたが、アアルトにおいては、そこでは打ち合わせが中心で、アイデアを生み出しスケッチを描くのは常に自邸のアトリエであったと言われる。

西側のアトリエは、窓の扱いが異なる場を作り出している。所員が座る中央部は、ハイサイドライトからの光が空間に明るさをもたらすが、外への視線は閉ざされドローイングに集中できる環境が作られている。一方、アアルトやアイノが座っていた庭側の席には、コーナーウィンドウが設けられ、庭を見て気分転換をしながら思いを巡らすことができる。そして反対側、数段の階段を登った奥には読書室があるが、ここの建築のアイデアを生み出すのに大切な場であったであろう。

コエタロ（実験住宅）は、アアルトとエリッサの夏の家として1954年に建設された。当時はボートでしかアプローチ出来なかった小さな島の木立の中、湖を望む場所に建てられたが、立地自体が内省的な環境にある。時に仕事も持ち込まれたようで、居間の奥の小さな急勾配の階段を上ってたどり着く屋根裏スペースには製図板がおかれている。

そして、この住宅の中心と言われ、古代の旧跡のような佇まいの中庭には、中央に焚き火用の炉が切られている。壁で囲いこみ守られた空間を確保することは、火を焚きそこに人間が寄り添うことは、ともに人間の初源的な行為であり、時と場所を超えて、過去から未来へとつながる永遠性の中で、深い思いに耽ることができるであろう。

コエタロの母屋から少し下った湖畔にはスモークサウナが造られている。この暗さに満ちた小さな閉じた空間も、思索を巡らすには格好の場であったに違いない。

武藤章の建築にみられる内省空間

鈴木敏彦（工学院大学）

武藤章（1931-1985）は1961年10月にフィンランドのヘルシンキに渡り、翌年の9月までアールト事務所に勤め、アールトに薫陶を受けた唯一の日本人建築家である。帰国後、北欧モダニズムを継承する数多くの建築作品と、アールトに関する著書を多数発表した。アールト本人から承諾を受けて1969年3月に出版した『アルヴァ・アールト』（SD選書、武藤章著）は、建築を学ぶ学生や建築家のバイブルとして今でも版を重ねている。武藤はこの本の巻頭に「建築—その真の姿は、人がその中に立った時にはじめて理解されるものである」というアールトの言葉を掲げた。

1979年12月に竣工した「工学院大学八王子図書館」の設計思想は、まさにこの言葉を思い起こさせるものであった。注意深く直射光を遮りながら間接光として自然光を取り込む大きなスカイライトや、閲覧テーブルに仕込まれた頭寒足熱の暖房、閲覧者ひとりひとりに用意されたオリジナルテーブルライトなど、日本における北欧ともいうべき表現が色濃く現れた心地よい図書館であった。しかし2014年10月、工学院大学評議員会によって解体が決定された。工学院大学建築系同窓会は強く保存を訴えたが、様々な理

由によって解体を阻止できない現実を直視し、改めて建築の記録と保存の方法を模索する中で、『建築を保存する本』の発行に至った。新たに撮り下ろした詳細な記録写真や論文、関係資料に加えて実施設計図の意匠図一式108枚が収録された。これらに基づけば、八王子図書館はいつの日か復元、再建することも不可能ではないという意思表示であり、同時に建築を保存する手法の提案でもあった。

1968年竣工の「工学院大学白樺湖学寮」は、武藤がアールトの事務所から日本にもどり、前掲の『アルヴァ・アールト』の書籍の執筆と時期を同じくして設計したこともあって、アールトの影響が随所に見られる建築である。こちらも2016年3月に閉鎖が決定され、解体の危機を迎えた。今回は同じ轍を踏むまいと交渉した結果、建築系同窓会が大学から土地の借地権および建物を引き継いだ。現在、増築部分を減築して原型にもどし、「白樺湖 夏の家」として動態保存している。この保存と継承の取り組みが評価され、2018年度の「第4回これからの建築士賞」（日本建築士会）および「第18回JIA25年賞」（日本建築家協会）を受賞した。これらを糧として、武藤の追求した建築とは何かを再考する機会としたい。

ヴィープリの図書館 1/50

Library, Viipri 1927-35

模型制作：名古屋市立大学大学院 久野紀光研究室
+ 名城大学, 愛知淑徳大学, 大同大学 2018年



セイナヨキの図書館 1/50

Library, Seinäjoki 1960-65

模型制作：名古屋市立大学大学院 久野紀光研究室
+ 名城大学, 愛知淑徳大学, 大同大学 2018年



マイレア邸ウィンターガーデン 1/20

Winter Garden, Villa Mairea 1938-39

模型制作：東京理科大学理工学部
岩岡竜夫研究室 2019年



ルイ・カレ邸 1/100

Maison Louis Carré 1956-59

模型制作：A. アルト住宅模型ワークショップ
2000年



アアルトの夏の家 (コエタロ) 1/100

Aalto's Summer House (Koetalo) 1952-54

模型制作：A. アルト住宅模型ワークショップ 2000年



アアルトの夏の家 (コエタロ) 1/20

Aalto's Summer House (Koetalo) 1952-54

模型制作：A. アルト住宅模型ワークショップ 2017年



スツール 60

Stool 60 1933

模型制作：工学院大学建築学部 2018年



旧工学院大学八王子図書館 1/50

設計：武藤章 | Designed by Akira Muto 1979

模型制作：工学院大学建築学部鈴木敏彦研究室 2019年



ロヴァニエミの図書館 1/50

Library, Rovaniemi 1961-68

模型制作: 東京理科大学理工学部

垣野義典研究室 2019年



マイレア邸 1/100

Villa Maireia 1938-39

模型制作: 東北芸術工科大学 デザイン工学部

西澤高男研究室 2019年



ルイ・カレ邸 玄関ホール 1/25

Entrance hall, Maison Louis Carré 1956-59

模型制作: A. アアルト住宅模型ワークショップ

2000年



ルイ・カレ邸 図書館 1/20

Entrance hall, Maison Louis Carré 1956-59

模型制作: 東京理科大学理工学部

岩岡竜夫研究室 2019年



アアルトの夏の家 (コエタロ) 1/20

Aalto's Summer House (Koetalo) 1952-54

模型制作: 香川浩 2000年



アアルト自邸 1/50

The Aalto House 1934-36

模型制作: A. アアルト住宅模型ワークショップ 2000年



工学院大学白樺湖学寮 1/50

設計: 武藤章 | Designed by Akira Muto 1968

模型制作: 工学院大学建築学部 武藤章研究室



写真スライドショー セイナヨキ図書館ほか

制作: 小泉 隆

